

〈モノ〉の表情・眼力の実証研究 ― 続 ―

渡邊克巳 (東京大学先端科学技術研究センター准教授)
Katsumi Watanabe

千手観音の評定実験

前々号の研究プロジェクト紹介では、「〈モノ〉にこころを感じるのはなぜか？」という疑問に至った経緯と、それを実証的に調べるために、京都に多数ある仏像に注目したことを述べた。また、仏像の表情・視線・姿勢の多様性や、仏像写真の撮影の角度・照明の違いなどといった、実験心理学の視覚刺激としての統制のなさを避けるために、新たに蓮華王院三十三間堂の千体千手観音像の画像を、均一の距離・照明のもとで撮影したところまでを紹介した。ある程度満足できる統制がなされた刺激があれば、あとは純粋に労力と時間の問題である。有名な千体千手観音像たちは、どのように認知されるだろうか？

評定実験には94名の被験者が参加した。仏像の画像はランダムな順

番で呈示され、それぞれの被験者は画像を見ながら、①仏像が男性と女性のどちらに見えるか、②仏像が何歳に見えるか(0~100歳の範囲で推定)、③仏像の視線をどれくらい感じるか(どれくらい見られていると感じるか:5件法)の3項目について評定を行った。この一般的な評定とは別に、表情・魅力度に関する評定実験も行い、そこでは70名の被験者が①仏像が「怒り」「恐れ」「悲しみ」「喜び」「驚き」「嫌悪」の6つの基本表情をどれくらい表しているか(5件法)、②この仏像がどれくらい好きか(9件法)を答えた(図1)。

表情の評定結果

紙面の関係で実験結果をすべて説明できないので、ここではその中のいくつかを簡単にまとめる。まず、三十三間堂の千体千手観音の顔画像は、平均して「40歳前後の男性」



図2 最も典型的な仏像(評定年齢=40.7歳;男性=95.7%)

と判断される傾向があり、この傾向は比較的安定している。多くの仏像が30~50歳の仏陀を象ろうとしたものであることを考えると、この結果は仏像に転写されたイメージが時代を超えて共有されている証左とすることもできる(図2)。また、これらの仏像群は「悲しみ」「軽蔑」「怒り」「喜び」「恐れ」「驚き」の順番で表情が評定されやすい。ただし、評定値に関してはどれかひとつの表情だけが突出しているわけではなく、複数の表情が同時に存在していること(表情の曖昧さ)が見てとれる(図3)。

興味深いことに、撮影角度が評定値にさまざまな影響を与えることも明らかになった。同一の仏像を撮影した画像であるにもかかわらず、斜め下(14度)から撮影した顔は、正面から撮影した顔に比べて、「より歳をとって」「より男性的に」「よりこちらを見つめているように」「より魅力的でなく」「より怒っているように」「より蔑んでいるように」見える(図3:表情以外のデータは

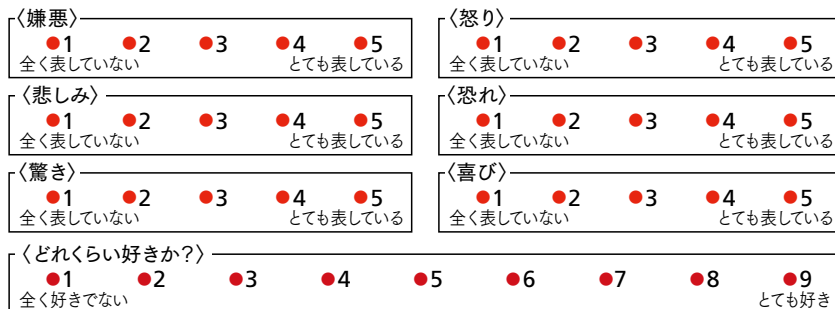


図1 評定実験の画面の例(表情・魅力度評定)(本稿の写真すべて撮影:三島淳)

Ariga et al. 2010等を参照)。これらの結果は、観察角度が同一の〈モノ〉を見る場合にも影響を及ぼしていることを示している。

さらに、それぞれの評定値の関係性を分析すると、仏像の魅力度を評定する際には基本的に「幸せ」と「怒り」の表情がプラスに働くが、それに加えて観察者が女性の場合には「悲しみ」がプラスの影響、観察者が男性の場合には「軽蔑」と「年齢」がマイナスの影響を持っていることなどが分かった(図4)。「幸せ」以外にも「怒り」の表情が仏像の魅力度を上げることもあるというのは、新しい発見であるとともに、多くの仏像ファン(?)の納得の行くところでもあろう。

観察角度で見え方変わる

現在までに得られた成果は、基本的には実験心理学の立場から〈モノ〉(仏像)の表情・視線の認知を調査したものであり、心理実験やその発展としての生理反応の計測等は今後とも着実に進めていく予定である。加えて、こころの未来研究センターというクロストークの場において、研究の裾野をより広いものにしていく



図5 左:主に男性に好かれる仏像。中:どちらにも好かれる仏像。右:主に女性に好かれる仏像

ことも重要と考えている。1つの方向性は、仏像を左右の角度や陰影を強調することなく、正面から高い精度で撮影した画像データベースの詳細な画像解析である。これらの画像は本プロジェクトに限り使用許可を得たものであり、仏像の物理的な微細構造や特徴を探る上で貴重なものとなる。もう1つは、〈モノ〉の表情とヒトの表情の共通点・相違点を探る研究である。本研究では、同じ仏像を観察する場合でも、観察角度によって見え方が変わる可能性が示された。それでは人間の顔でも斜め下から観察すると「年配の魅力でない男性的が怒って(あるいは軽蔑して)こちらを見つめている」ように見えるのだろうか? だとしたらどうして? ヒトの顔を左右に回転させたときの認知への影響を調べるものはいくつか存在するが、顔の

上下回転や上下位置を考慮した研究は少ない。本研究のように仏像というドメスティックな〈モノ〉の表情研究が、本家本元であるヒトの顔研究につながることを期待している。

本プロジェクトは、仏像等に代表される〈モノ〉に転写したものととしての表情・視線等を、実証的に調査することを目的とした分野融合的なものである。本研究プロジェクトに限らず、こころの未来研究センターでの研究は、学術的な成果に加え、異分野間のインタラクションやネットワークの形成などの uncountable なものを常に志向するものと理解している。今後も、今回の成果をもとに、〈モノ〉に転写された表情・視線・姿勢などの実証的な研究を、「こころ」というキーワードを中心に置きながらの異分野融合(あるいは再融合、あるいは戦略的拡散)を維持して研究を進めていければと考えている。

本研究に関する発表等

吉川左紀子 (2010/9/20) 顔知覚への多面的アプローチ, 日本心理学会 (シンポジウム), 大阪大学.

Ariga, A., Kitamura-Suzuki, M., Watanabe, K., & Yoshikawa, S. (2010) Perceiving the faces of Buddha statues: On the relation with viewpoint and affective evaluation. Proceedings of the Kansei Engineering and Emotion Research International Conference, 766-773. 吉川左紀子・有賀敦紀・北村(鈴木)美穂・渡邊克巳 (2009/8/27) 仏像の顔の認知: 眼が合うことの影響, 日本心理学会, 立命館大学.

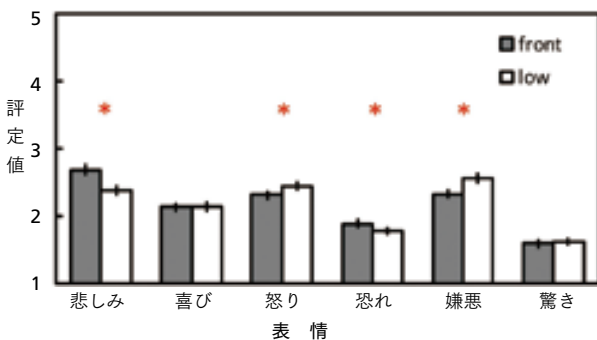


図3 仏像の表情評定 front=正面、low=斜め下14度。*は有為な差が見られたところ。



図4 仏像の魅力度に貢献する要因

上下回転や上下位置を考慮した研究は少ない。本研究のように仏像というドメスティックな〈モノ〉の表情研究が、本家本元であるヒトの顔研究につながることを期待している。

仏像の顔の魅力度を決める因子が、男性と女性で異なるかもしれないことは既に述べた(図5)。そこで、個人差という観点

近代技術的環境における心性の変容の 図像解釈学的研究

秋丸知貴 (日図デザイン博物館学芸員)
Tomoki Akimaru

図像解釈学とは何か？

一般に、動物は、それぞれ種に固有の感受器官と反応器官が構成する、固定的な「環境世界」(ヤーコプ・フォン・ユクスキュル)に閉じ込められている。これに対し、本能が壊れた「欠陥動物」(アーノルト・ゲーレン)である人間は、環境「世界内存在」(マルティン・ハイデッガー)であるとともに、環境「世界開放性」(マックス・シェラー)も有している。

エルンスト・カッシーラーは、この世界開放性の鍵を「象徴形式」と見る。つまり、人間は、感受系と反応系の上に象徴系を介在させ、「対象の代理」ではなく「対象についての概念の乗物」(スザンヌ・ランガー)として、抽象的・精神的内容を具体的に・感性的形式で表現する、象徴形式を能動的に形成することにより、自然から自由になると同時に自然を制御する。

そして、この象徴形式の中でも、言語的「イデア」に先行する、図像的「アイコン」(ハーバート・リード)としての造形芸術、特に絵画こそは、最初に外界と内面を調整し、認識と行為を調和させ、環境への適応を達成させる、人間文化の最も基礎的で根源的な象徴形式である。

これを受けて、同一の文化圏におけるさまざまな文化事象との照合を通じて、可視的な具現的・感性的記号の造形と画題に、それを創出した時代・社会に通底する不可視的な心性的・精神的意味内容を解釈す

る美学・美術史学方法論が、エルヴィン・パノフスキーが開拓した、「^{イコノロジー}図像解釈学」である。

近代技術的環境における 心性の変容——アウラの凋落

本研究プロジェクトは、この図像解釈学を近代西洋美術に適用し、その本質的特性である抽象主義に、近代技術的環境における心性の変容の反映を考察する。

まず、ヴァルター・ベンヤミンの「アウラ」は、原著に即して分析すれば、同一の時間・空間上に共存する主体と客体の相互作用により相互に生じる変化、および相互に宿るその時間的蓄積と読解できる。また、そうしたアウラを典型的に生み出す、主体が客体と同一の時空間上で原物的・直接的・集中的・五感的に相互作用している関係を「アウラの関係」、その場合の主体の客体に対する知覚を「アウラの知覚」と定義できる。

基本的に、生来的身体と本来的自然に基づく「自然的環境」(ジョルジュ・フリードマン)では、技術は肉体の連続的延長であり、動力は天然自然力に依存しているため、人間は環境に物理的に内包され織り込まれていた。したがって、自然的環境では、一般的に、人間と外界の関係は密接的で沈潜在的なアウラの関係であり、その知覚は持続的で充実的なアウラの知覚であった。

そして、このアウラの知覚を必須的前提として発達したのが、伝統西洋美術の根本的特徴である、自然主

義的なルネサンス的リアリズムである。なぜならば、その特質である緻密で具象的な再現描写には、対象との濃密で没入的な「感情移入」(ヴィルヘルム・ヴォリンガー)的相互関与が経験上不可欠だからである。

これに対し、日常生活のさまざまな場面で、主体と客体の間に「有機的自然の限界からの解放」(ヴェルナー・ゾンバルト)を招く各種の「近代技術」が介入すると、そうした主客の自然な心身の相互交流は現実的に阻害され、主体の「感覚比率」(マーシャル・マクルーハン)は捨象的に変更され始める。その結果、「近代技術的環境」では、主体には、アウラの関係が十全に成立していない「脱アウラの関係」による「脱アウラの知覚」が発生することになる。

そして、そうしたアウラの知覚の衰退につれて、徐々に絵画においては、従来の主流であったルネサンス的リアリズムは妥当性を喪失し、動態的・間接的・二次元的・抽象的な近代技術的環境に象徴的に適応することになる。すなわち、「アウラの凋落」(ヴァルター・ベンヤミン)と近代西洋美術における抽象主義は、軌を一にする現象である。

抽象絵画と近代技術—— こころの未来研究の一事例として

これらの過程は、「印象派と大都市群集」「セザンヌと蒸気鉄道」「フォーヴィスムと自動車」「抽象絵画と飛行機」「『象徴形式』としてのキュビスム」「抽象絵画と近代照明」

「抽象絵画と写真」等として主題化できる。

まず、蒸気機関による商工業・運輸交通の加速的大量化を背景に台頭する大都市群集では、大勢が足早かつ無関心に行き交うので、次第に個々の通行人は、実体を欠く単なる刹那的な視覚印象に過ぎなくなり、やがてそれら全体は、絶え間なく変化し続ける万華鏡的パノラマと化する。この大都市群集による、静態的具象性の希薄な流動的・疎外的な脱アウラの知覚を手法化したのが、印象派の斑点描法である（図1）。

また、蒸気機関と線路の結合による蒸気鉄道の車窓風景では、その脱自然的な速度と運動により、瞬間的刺激が増加し、大都市群集と類似する知覚変容が生起するとともに、さらにさまざまな視覚的歪曲が加味される。この蒸気鉄道による脱アウラの知覚を、一種の「感覚」として「実現」しようとしたのが、後印象派のポール・セザンヌと考えられる（図2）。

さらに、蒸気鉄道では、乗客の視覚はまだ平行的・受動的であるのに対し、自動車では、運転手の視覚はより前進的・能動的であり、その脱自然的な速力と駆動により、フロントガラスに映る事物は、触覚の減退と視覚の突出とともに、色も形も強烈に激動化する。この自動車による脱アウラの知覚を絵画化したのが、フォーヴィスムと解釈できる（図3）。

そして、これらの脱自然的な地上の水平運動に、文字通り離陸的な空中の垂直運動を付加する飛行機は、飛翔の心身解放によりさらに視覚を純粹化するとともに、高度上昇による地表の抽象化をもたらす。この飛行機による脱アウラの知覚も、抽象絵画の先駆者たちに大きく影響している。

また、こうした蒸気鉄道・自動車・飛行機等の移動機械は、その脱自然

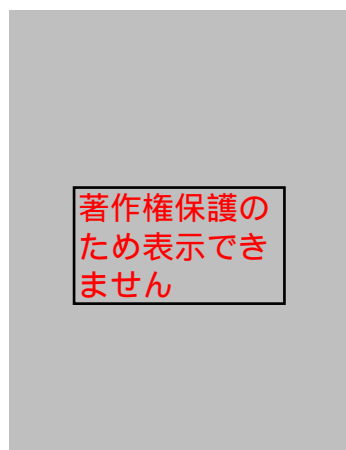


図1 クロード・モネ《カピュシーヌ大通り》1873年 油彩

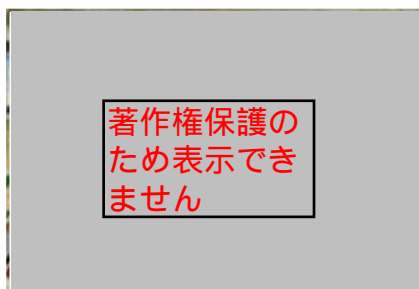


図3 アンリ・マティス《フロントガラス》1917年 油彩 ©2010 Succession H. Matisse / SPDA, Tokyo

的な急速的物品移動により、理念的に、あらゆる空間的遠隔地を時間的近接地と意識させ、旧来の自然で固定的な時空間概念を崩壊させる。また、電話、無線、X線、蓄音機、ラジオ、写真、映画等の伝達機械も、その脱自然的な超越的情報伝達により、想念的に、あらゆる個別的事象を臨在化させ、古来の自然で不変的な時空間概念を瓦解させる。こうした近代技術による、観念上の平面的・一覽的・モザイク的・相互貫入的な脱アウラの知覚を象徴化したのが、キュビズムと理解できる（図4）。

これに加えて、ガラス建築や人造光は、その一様で強力な照明により屋内から陰翳を駆逐し、天然の自然な形態感覚、立体感覚、空間感覚、時間感覚を攪乱するとともに、視覚的な感覚刺激を増強する。こうした近代照明による脱アウラの知覚も、抽象絵画の開拓者たちに広く反映している。

そして、写真は、被写体の外見のみを感光的に転写することで、写

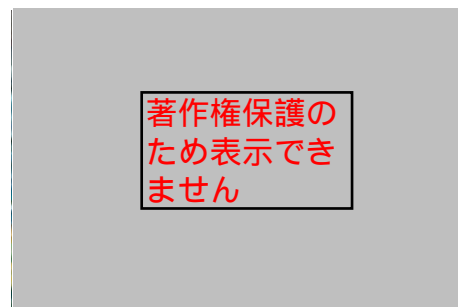


図2 ポール・セザンヌ《サント・ヴィクトワール山と大松》1887年頃 油彩

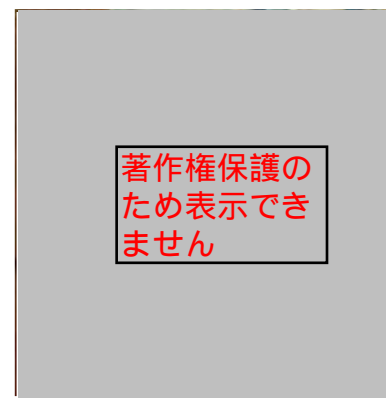


図4 パブロ・ピカソ《アヴィニョンの娘達》1907年 油彩 ©2010 - Succession Pablo Picasso - SPDA (JAPAN)

像から実物的要素を剥落させるとともに、観賞者と被写体を決して同一の時空間上で相互交流させないことで、情動的な感情移入も減衰させる。こうした、あらゆる事物を単なる形と色という自律的・非対象的な抽象模様に変貌させ、傍観者の感受性も涵養する、写真による脱アウラの知覚もまた、抽象絵画の推進者たちに深く感化を及ぼしている。

結論と展望

以上のように、近代絵画における抽象主義を促進した実際的・絶対的要素の1つが、近代技術によるアウラの凋落であると指摘できる。

本研究プロジェクトは、こうした近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究を通じて、「近代」のプラス面とマイナス面を批判的に検証するとともに、こころの未来研究における美学・美術史学領域の可能性を多角的に模索したいと考えている。

こころと身体をつなぐメディアとしての味覚研究： 食の「質」をふまえた食教育の検討

荒牧麻子 (管理栄養士、女子栄養大学非常勤講師)
Asako Aramaki

はじめに

長々とした研究課題をご覧いただき、「何を」しようとしているチームなのかをすぐに連想いただくのは無理であろう。しかし、「食育」を解剖しようとしていると申したら、少しは可視化された一部を思い浮かべていただけるかもしれないと思う。

平成17年(2005)6月に成立した「食育基本法」には「子供たちが健全な心と体を培い、未来や国際社会に向かって……(略)」とあり、その基本方針のもと、地域、教育現場、家庭に向けた数々の試みが実用化されてきている。しかし、具体的に食の何をどのように子どもたちに教えることが適切なのか、特に「食とこころ」についてはその根拠を十分に議論されないまま今日に至っていると感じている。そのことへの問いを抛り所にし、大石高典さん(センター特定研究員)を筆頭に gourmand (gourmand) な研究者が集った末誕生したのが今の研究チームである。

研究の進め方については、吉川左紀子センター長、鎌田東二教授、山極寿一理学研究科教授、仏味覚研究所 J.Puisais 博士らのご教示をいただきつつ、年数回にわたり京都・東京・篠山で研究会を開催、2年目となる今年には篠山での合宿とフランスの研究者交流会開催も予定されている。

京大生と味覚教育

公募連携研究申請に至ったきっかけは、筆者がここ数年関心を寄せて

いる、EU諸国で8~10歳を対象として長年実践されてきている「味覚教育」がある。一口で説明し紹介することに常々苦勞しているが、フランス語では LE GOÛT、和訳すると「味覚」となる言葉、多くの人は美味しさの形容や秋の味覚などという使い方を思い浮かべるであろう。実は、食・味わいの愉しみというような意味が込められているのだが、適切な表現を見つけ出せないまま今日に至っている。

すなわち味覚教育はその方法を学ぶあるいは教授することであるが、具体的な説明はフランスの小学校と保育園で収録した映像と邦訳版著作を紹介し言葉で補足するとともに、味覚授業を実際に体験して理解を深めているのが現状である。

異国で30数年にわたり実施されている教育実践活動の中にも前述の問いへのヒントがあるような気配を感じている。これらに携わる日仏の関係者や学校と平成15年(2003)から毎年交流を続けてもいる。現在、筆者は食物・栄養・調理・外食産業関係の学生に、デファクトスタンダードと化した「フードコーディネーター」と呼ぶ民間の食資格取得養成講座カリキュラムとして味覚教育と味覚授業を実施している。

一方、京都大学でも印象深く興味の持てる企画が実施された。平成20年(2008)12月に京都の日本料理アカデミーという料亭料理人・経営者の団体などとの協働による学生向け講座が組まれた。テーマ「本物のダシを味わうことは教養である」



図1 京都新聞掲載記事(2008年12月16日朝刊)



図2 フランスの幼稚園の味覚授業風景



図3 ダシに欠かせない「かつを節」

との呼びかけに多くの学生が集まった。内容は、京料理の料理人によるダシの味わいに関する短い講義、料理人による料亭のダシの引きかた体験で、講義と実演・実習企画である。京都の一流料亭の料理人が作る吸い物を無料で味わえるまたとない機会であった。それぞれの名店で使われている金蒔絵の吸い物椀に、逸品と称されるダシの食材といい、まさにすべてにわたって「極上」を追求したひと時、「京大版味覚の授業」と受け止めた。

食の現状「食べることを問う」

心理学を1つの核としたこの研究センターに、人を対象にしているにせよ、異分野の研究者が集い情報交換をするには、前菜的と言うか、本題に向かう前に、浅いながらも食育の歴史的な経緯を整理する必要性があると思う、旧知の横浜国立大学教育人間科学部教授であり、同大付属小学校校長を務められている金子佳代子氏に、食育基本法の成立背景となった教育現場における「食教育・生活学習」の現状報告をお願いした。ここでは、嗜好の満足、共食、安全、安心、衛生、食文化、環境、経済性、簡便性、ファッション性など



図4 研究のきっかけとなった山極寿一『サルはなにを食べてヒトになったか』(女子栄養大学出版部)

食にかかわるいくつかのキーワードが組上に載せられた。

続いて、社会システムに組み込まれてはいないが教育に準じる現場からの報告を、山梨大学川村協平教授「野外活動の経験とこどもの感性・問題解決力」に託し、篠山チルドレンズミュージアム（兵庫県）のスタッフから「食関連イベント実施の現状」の報告、アメリカミネソタ州立大学で社会文化心理学を担当されている Norasakkunkit Vinai さんから「食の嗜好性発達の日米文化間比較仮説」と題し青少年の食嗜好・味覚形成について、さらに北海道大学大学院山内太郎准教授からは保健学の立場から「東南アジア半島部のこどもの栄養と成長」、大石高典特定研究員から「アフリカ熱帯林の社会における野外キャンプの意義とこどもの食生活」、鎌田東二教授から「京都の奉納文化と神饌」、東京大学大学院農学生命科学研究科藤原辰史講師から「ナチ・エコロジズムと台所政策」などの発表をいただき、現代社会の食を再認識した。

ヒトと食の成り立ちと味覚

人類にとって、食は生存に欠かせない営みであると同時に社会的・文化的に大きな意味を持っている。そして、私たちは家族や仲間にとって「食の分ち合い」は精神的な確認作業でもあることを日常の食行動で実感しているわけである。食はこころと身体、個体と社会をつなぐ「メディア」という立ち位置。このような新しい食への切り口が吉川センター長との会話から誕生した。

もとより食は地域性と文化性の高い営みであり、その基盤となっているのはヒト（人）の嗜好性に代表される味覚であると考え、研究会は「味覚」に焦点を当てた報告とセ



図5 東京国立科学博物館人類展示「人類進化と食べ物」
人類の進化と食のつながりが、子どもたちにも分かりやすい形で展示されている

ミナーへと広がった。神戸大学大学院農学研究科笹山フィールドステーションの布施未恵子さんからは「霊長類の昆虫食行動に見られる嗜好性」の報告、そして理学研究科人類進化論研究室とこころの未来研究センター合同でパリ自然史博物館から3名の研究者を迎えて「ヒトを含む霊長類の採食行動進化と発達」と題する最新成果の発表と論議があり、味覚と味覚行動の真髄に迫った。

促成栽培的「食育」としないために

さて、今年度も食行動と味覚に関する先行研究の情報交換を内外の研究者と行いつつ、子どもが集い、通い合うフィールドでの行動観察を実施し、食がもたらす「満足感」や「なごみ」を学際的に解き明かすことを進める。同時に、研究者自身の日常的「食」も研究対象にいれ、「自分で料理し味わうこと」「食の質を測る」などのテーマを掲げ、食の実践活動への批判的でありながら現場的な視点を討論し発表していく予定である。

さらに、発足の歴史は浅いながら、子ども（主に幼児期）の発達について専門家が論じあう日本こども学会など幼児教育に関係する研究の中で、従来の栄養・保健・小児科的視点とは異なる「味覚教育」「食べ物教育」がどのように位置づけられているかを整理したいと考えている。

発達障害への心理療法的アプローチ

畑中千紘 (こころの未来研究センター特定研究員)
Chihiro Hatanaka

プロジェクトの始まり—— 発達障害と心理療法

近年、発達障害という概念が急速に注目を集めている。自分は発達障害ではないかと心理相談機関の門をたたく人は急増し、神経症的な主訴で来談するケースのなかにもその背景に軽度の発達障害が認められるケースが少なくない。これに対し、発達障害には教育・訓練的アプローチが有効で、心理療法はいじめや不適応など二次障害にのみ対応できるものと考えられていることが多い。おそらくこれには、発達障害が「疾病」や「傷害」のように治癒可能なものではなく、永続的な「障害」と捉えられていることも大きいだろう。つまり、発達障害は根本的に「変える」ことが難しいものであるから、具体的なスキルを教えることで生活を円滑にすることが有効な援助と考えられているのである。

ところが実際には、京都大学心理教育相談室をはじめ、発達障害に対して心理療法が有効に働いていると考えられる事例に出会うことも多

い。もちろん、心理療法によって完全に発達障害が「治癒」するというわけではないが、発達障害の人が生きている世界のあり方が変化するような事例を目にすることはそれほど少なくないように思われる。

しかし、このような心理療法の成果はプライバシーの問題があって一般には公開されにくい。そこで本プロジェクトでは、専門家による継続的な事例検討会や調査研究を通じてそのエッセンスを抽出することを試みてきた。これによって一般に公開できる形で発達障害の特性とそれに対する心理療法的アプローチの有効性を示すことが目指されてきたのである。

プロジェクトの成果 1 〈発達障害の本質を捉える〉—— 主体のない世界

発達障害へのアプローチを考えるにあたり、その特性を正しく捉えることが必要である。筆者は、発達障害の人には流暢に話ができる人であっても他者の言葉を受けとり損ねることが多いことへの着目から、軽

度発達障害の成人を対象に話の聴き方に関する調査研究を行ってきた。その結果、人の言葉を無機質な音声データとして取り入れていて、他者に対してコミットする主体が感じられない場合や、他者の話を自分の考えや印象と混在させて取り入れるために、自他の区別がなくなっている場合などがみられた。これは、彼らが言葉の意味や物語を受けとめる「主体」として他者の前に存在していないことを示唆していると考えられる。

一方で、彼らにはここにこと愛想よく話を聴いているようでもあり、ある意味では状況に適応しているようにも見えた。このような表面的印象と、相手の話の「意味」を受けとっていない実態とのギャップは、彼らが周囲からネガティブに評価される一因となっていると考えられた。発達障害の支援を考える際には、適応的言動・行動のための指導に重点が置かれがちであるが、彼らが他者や社会をどのように体験しているのかについて理解しておくことがまず重要であろう。

この成果は「話の聴き方からみた軽度発達障害一対話的心理療法の可能性」として京都大学大学院教育学研究科に博士学位請求論文として提出され、受理されている。

プロジェクトの成果 2 〈心理療法的アプローチのポイント〉—— 主体の発生に立ち会う

従来、心理療法はクライアントの“主体”を前提としてきた。“主体”



事例検討会のような様子



プレイルームには、たくさんのおもちゃがある

とは難解な概念であるが、これは“自分のことをみる自分”とも言い換えられる。心理療法では治療者が問題解決のために直接働きかけたり客観的なアドバイスを与えたりするのではなく、クライアント自身が“自分で自分のことを考える”場を提供し、そのプロセスを共に歩むことが大切である。子どもの場合でも同様で、セラピーの中で自由に遊んでいるうちにその子のテーマが遊びの中に象徴的に表れてきて、子どもは治療者と共に遊びながら自分なりに問題に取り組んでいくことになる。

しかし上記の調査でも明らかにされたように、発達障害においてはそうした“主体”を想定することが難しいためにこのような展開が起こりにくい。それでは発達障害の心理療法ではどのようなことがポイントとなるだろうか。

まず子どものケースについて述べると、“○○ごっこ”とか積み木や粘土で何かを作るような象徴的な遊びは行われず、延々と砂をばらまき続ける、棚のおもちゃを落とし続ける、ミニカーを並べ続けるなど、同じモノや動きへの執着がみられる場合がある。治療者側もそこに何かのイメージや物語を見出すことが難しく、毎回のセラピーが単調な繰り返しのようになることが少なくない。また、治療者がモノのように扱われて関係を築くこと自体が困難に思える場合もある。そこではバラバラ、ぐるぐるの世界が展開されて「中心」

としての主体が想定できないのである。

このような子どものセラピーにおいては「融合と分離」がポイントとなる。遊びの中で「融合」状態が作り出され、すべてが一体となったカオスに「分離」が生まれることが子どもの主体の発生の瞬間と捉えることができるのである。たとえば、砂や絵の具や水がどろどろと混ぜられる遊びの後に、それを別々の器に分けていくような遊びへ移行するときなどは、融合から分離が生まれるポイントと考えられる。

また、終了時間になっても子どもがなかなかプレイルームから出ようとしないことがあるが、その際にも時間通りに部屋を出ることが重要である。その際に子どもが泣いたり叫んだりするならば、それは時間の終わりという形でセラピーの時間と日常の時間の「区切り」を体験する主体が立ち上がる瞬間と考えられるからである。

次に大人のケースの場合であるが、対人関係や社会適応に困難を示しやすい発達障害の人たちとの面接でも、神経症のケースなどと同様に不安や葛藤の話がなされる。しかし、よく話を聴いてみると、訴えられる症状や不安は内的に作り出された心理的なものとは捉え難い場合が多い。たとえば雷恐怖を訴える一方で「耳をふさいでいれば大丈夫」と言う事例や、家族が重篤な病を宣告されて強い不安状態に陥っても、医師から「生存率は40%」と具体的な数字を呈示されると急に落ち着いてゲームを始めるような事例がそうである。不安とは本来、冷静にみれば大丈夫とわかっている、その人の心が不安を作り出し、客観的な理屈を超えてその人の主体に迫ってくるものである。発達障害ではそうした不安を作り出し、巻き込まれる中核としての主体が欠如しているために不安に内的必然性がなく、雷が聞こ

えるまさにその瞬間に直結するものであったり、客観的情報によって簡単に消去されうるものであったりするのだろう。

このようなケースに対して、治療者がクライアントの洞察を待つようなメタレベルからのアプローチはあまり有効でない。むしろ質問に直接答えたり率直に意見を表明したりして治療者の方が存在をかけてぶつかるといった対応が大切である。そのような瞬間、クライアントが想定していなかった他者として治療者の存在が立ち上がり、それと同時にクライアントの主体も立ち上がると考えられるためである。

おわりに—— 発達障害プロジェクトの未来

ごく簡潔にポイントを紹介してきたが、実際の心理療法ではこれらがさまざまな形で起こってくる。治療者のほうがポイントを逃さず、それぞれのケースに適切に対応することが重要であろう。これらについての詳細は河合俊雄編『発達障害への心理療法的アプローチ』として創元社より刊行される予定である。

また、現在プロジェクトチームによって発達障害の子どもを対象とした実践研究の計画が進められている。具体的で即効性のあるものを求める傾向が強まる昨今、発達障害に心理療法からアプローチする研究は主流ではなくなってきたが、心理療法が発達障害に対してどのような仕事ができるのかについて臨床データに基づいた成果を示すことができるのではないかと考えている。

こころの未来研究センターでは複数のプロジェクトが異なる角度から発達障害にアプローチを試みている。引き続き多角的な研究成果を発信していくことを目指したい。

平安京生態智と癒し空間の比較研究

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)
Toji Kamata

はじめに——研究の経緯

2007年より3年間、京都府の助成を受けながら「京都における癒しの伝統とリソース」(研究代表者:河合俊雄教授)の研究プロジェクトを進めてきた。「京都における癒しの伝統とリソース(資源)」とは、具体的に言えば、神社仏閣などのハード面と、そこにおける祭祀・儀礼や修行・修法や参拝・参詣・巡礼・観光などのソフト面を含んでいる。

実際、今なお京都の神社仏閣や祭りは国内外でも有数の観光の対象となっており、昨今の「パワースポット」ブームの影響もあって、広範な関心と人気を保っている。この、多くの人々のこころを惹き付け、安定や癒しをもたらすことのできるメカニズムや仕掛けとは何なのだろうか? 場所の力? ファンタスティックな建築空間? 荘厳なる象徴形式? エキゾチックなパフォーマンス? トランスする沸騰やそれとは対極の静寂?

このいわゆる「癒し空間」の研究は、臨床心理学、宗教学、民俗学、認知科学、地球科学、生態学などさまざまな方法と視点によりアプローチし、その空間の特質やそこでの身心変容を解明することを通して「臨床の知」や「臨地の知」を深めつつ、伝統文化に保持されてきた心の練り方や底力を現代にブラッシュアップし生かすことを目的としている。

研究成果の一部は、すでに、河合俊雄・鎌田東二『京都「癒しの道」案内』(朝日新書、朝日新聞出版、

2008年)、鎌田東二『聖地感覚』(角川学芸出版、2008年)、鎌田東二編『平安京のコスモロジー』(創元社、2010年)、渡邊克巳「モノの表情・眼力の研究」(「こころの未来」第2号・第5号、2009年3月、2010年9月)などの出版物や論考、またシンポジウム「平安京のコスモロジー」(2008年11月)「物語の発生する場所とこころ——『遠野物語』と古典」(2009年11月)などにより社会発信している。

これらの研究活動を踏まえて、本年度より新たに「癒し空間の比較研究」を始めた。ここでの「癒し空間」とは、伝統的な神社仏閣のみならず、広く、「オタクの聖地・アキハバラ」や「冬ソナの聖地」や高校野球のスタジアムなども含む。今年度は、相模の国(現在の神奈川県)の一ノ宮の寒川神社からの寄付金などにより、すでに、「平安京生態智・寒川神社研究会」との合同研究会を3回、フィールドワークを3回実施している。

癒し空間の比較研究——事例研究としての御所と首里城の比較

そもそも「宗教学」という学問は、19世紀後半のヨーロッパにおいて「比較宗教学」として発展してきた。比較言語学、比較神話学、民俗学、文化人類学・社会人類学など、関連する学問諸領域と連動しつつ、宗教現象や宗教思想の比較研究が蓄積されてきた。そこにおいて、聖地や霊場などの「癒し空間」や参詣・参拝・

巡礼の研究も積み重ねられてきた。日本では、熊野や伊勢や四国遍路などの参詣・巡礼研究には相当の蓄積がある。

しかしながら、そうした「癒し空間」がどのような個性や共通性や特性を持っているかの比較研究はそれほど多くはない。近年、民俗学者の内藤正敏らによって、江戸と京都の宗教空間の比較などがなされるようになってきたが、まだまだ部分的な個別の比較研究の段階であるといえる。

そこで、本研究プロジェクトにおいては、自分たちの研究と生活の拠点である京都(平安京)を比較の基軸と定点に据えながら、そこと、例えば、平城京・奈良、江戸・東京、琉球・首里、伊勢、吉野・熊野、出雲、アイルランド、バリ島、パリ、ローマなどとの、地域内比較・地域間比較・国際比較を進めていきたいと考えている。どこまで、どの程度の範囲と精度で比較研究をするかについては、時間と労力と費用と方法論な



鎌田東二編『平安京のコスモロジー』(創元社、2010年)

ども関係するので、全体像を視野に入れながら、できるところから着手していているというのが現状だ。

特に本年度に関心を持って進めつつあるのが、大和の国・藤原京・平城京、琉球・首里城、江戸・江戸城と平安京・御所との比較研究や、相模の国の延喜式内社と山城の国の延喜式内社の比較研究である。藤原京や平城京と平安京との比較については、前掲『平安京のコスモロジー』の中の拙論で少し考察したが、琉球・首里城と平安京・御所のコスモロジーや宗教空間の比較をしてみればどうなるか。首里王府と平安京を、宮都（都城）、最高司祭、神聖地、神聖歌謡、始原の島、始祖の神々などの観点から比較すれば、どのような共通項と差異性が見えてくるか、少しく紹介してみたい。

首里城は内郭が15世紀初期、外郭が16世紀中期に造られ、西面している。それに対して、御所は南面している。つまり、玉座に向かう時に東面するか北面するかという違い。換言すると、北上位と東上位の違いである。

御所の建築思想は天皇が北極星を背にする不動の位置にあるという思想に基づいており、それは中国の天子南面思想の受容によるものであるが、古代日本ではその北上位思想に先行する思想と信仰として東上位の思想と信仰があったと考えられる。沖縄の首里城は築城年代こそ15世紀以降と新しいが、それを支える建築・方位思想と信仰は大変土着古代的である。

首里城が東上位であるということは、琉球王が北極星ではなく太陽を背にして座るということであり、ここには明らかに太陽信仰、それも東から差し上げる朝日に対する信仰がある。東の海上にはニライカナイと呼ばれる海上他界があると考えられたが、そのニライカナイから届く冬至の光が沖縄本島の東南に位

置する久高島を經由して、^{せうじょう}斎場御嶽、^{ひんけ}弁ヶ岳（弁ヶ大嶽・弁ヶ小嶽）、首里城へと至る。朝日に刺し貫かれた軸線上に御嶽と呼ばれる「癒し空間」すなわち聖地と城が点在する。

沖縄の風水地理は、①南方に位置する小禄と豊見城^{とみ}連峰が青龍、②西方に位置する慶良間島^{けいらまじま}が朱雀、③北方に位置する読谷村^{よみたんそん}・北谷山が白虎、④東方に位置する弁ヶ岳が玄武とされる。だが通常、青龍が東方、朱雀が南方、白虎が西方、玄武が北方を護る霊獣である。つまり、琉球と中国や日本の風水地理は90度ずれている。琉球風水は東上位を基軸に成り立っており、これは藤原京が建都されるまでの古代日本の方位信仰と同じだったと思われる。要するに、北上位の前に古く東上位のコスモロジーがあったということだ。

それゆえ、「神の島」と呼ばれる東方の久高島を望む沖縄本島東南部の知念村や玉城村の聖域である御嶽や城を巡拝する神拝行事を「東御廻い」と呼ぶのも、「東」が上、すなわち「アガリ」だからである。この「アガリウマーイ」は14カ所の御嶽や城などの「癒し空間」をめぐる巡拝行である。この東上位思想が今も沖縄の人びとの世界観の中に息づいている。

次に、琉球神話と日本神話の始祖神を比較してみよう。袋中著『琉球神道記』（1605年）では、『古事記』（712年）や『日本書紀』（720年）におけるイザナギノミコト（男神・夫）とイザナミノミコト（女神・妻）に対応する始祖神は、アマミキヨとシネリキヨである。日本神話ではイザナギ・イザナミが男と女でその順番に登場するが、琉球神話では女神のアマミキヨ、男神のシネリキヨの順番に登場し、天から降りてきて島に木や草を植えて国土を作ったとされ



首里城公園 第2次世界大戦で破壊された首里城は、1992年に正殿などが復元された。（提供：首里城公園管理センター）

る。つまり女性優位。そして、この二神は風によって妊娠し、長男が王や按司などの支配者、次に長女が間得大君やノロやツカサなどの女性司祭、三番目の子が一般庶民となっていたという。

このように、首里城や御所の構造とそれを支えるコスモロジーや神話的思考や祭祀体系を比較すると、それぞれが持つ特質が浮き彫りになってくる。それを概括すると次のような表にできるだろう。

表 琉球王府と平安京の比較

地域	琉球王府	平安京
祭政の中心	首里城	御所
最高司祭	間得大君	斎王
聖域	御嶽・城	神社・寺院
歌謡	おもろそうし	古事記・万葉集
始原島	久高島	淡路島
始祖神	アマミキヨ・シネリキヨ	イザナギ・イザナミ

おわりに—— 「癒し空間」の衰退と未来

このようなコスモジカルな思考は、明治維新以降の近代国家システムの中では捨象ないし変形されてきた。そして今、沖縄は基地問題で大揺れに揺れ、京都では葵祭の葵は自生せず、また深刻なナラ枯れが進行している。両者の「癒し空間」は極度に疲弊し、衰退しつつあるのだ。矛盾するようであるが、そんな全体状況の中での「パワースポット」ブームである。この事態そのものが、日本の現代の混乱を象徴しているといえよう。